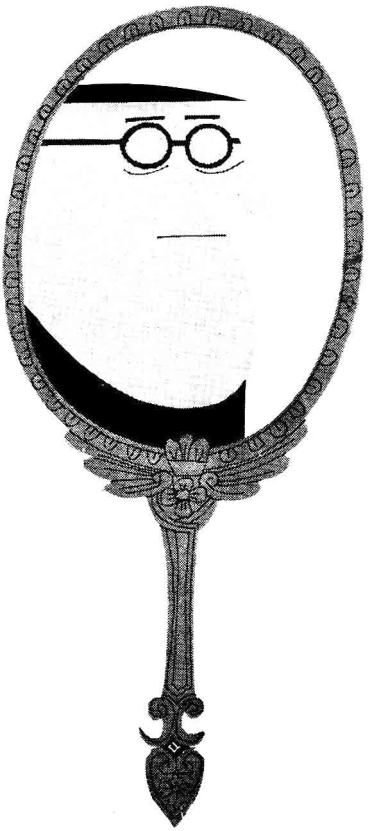
# 男性自身

山口瞳

# 男性自身

山口瞳



新潮社

# 男性自身

昭和四十年七月二十日　発行
昭和四十七年十月三十日　十刷

定価　四三〇円

著者　山口　瞳

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(269)二二番(大代)
振替東京八〇八番

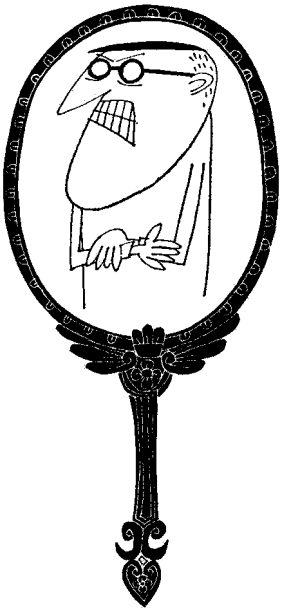
乱丁・落丁のものはお取替えいたします。

印刷・石福印刷株式会社　製本・新栄社製本所


© Hitomi Yamaguchi 1965　Printed in Japan
文中の歌詞　日本音楽著作権協会出認第400786号

# 目

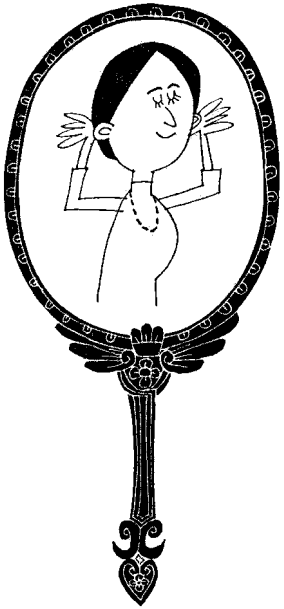
# 次




ケ　九
チ　九
私の赤ちゃん　一四
顔　一九
酒飲みの夜と朝　二三
あやまち　二八
冬の公園　三三
焚火　三八
ザボン　四三
女の知恵　四八
賭け　五三

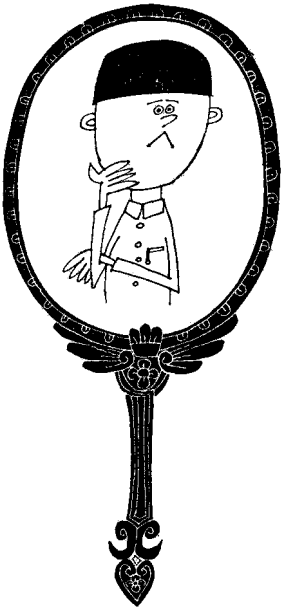

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

乘車拒否　五八
カレーライス　六三
時　計　六八
新婚旅行　七三
春のめざめ　七七
大男の話　八二
人生は楽しいか　八七
住いのこと　九二
買　物　九七
煙　草　一〇二




不機嫌のすすめ　一〇七
愛と認識との出発　一一三
健康について　一一七
樅ノ木は　一二三
ノート・ブック　一二七
白鳥の湖　一三二
女房　一三七
テーブル・スピーチ　一四二
貧乏　一四七
イヤな奴　一五二

股　旅　一五七
金　魚　一六二
キ　ザ　一六七
京言葉　一七二
麦稈帽子　一七七
ネフリュードフの心配　一八二
インディアン・サマー　一八七
街　一九二
ラスト・ダンス　一九七
ナマケモノ　二〇二




戦中派　二〇七
なんという国　二二二
肉と自転車　二二七
負けるが勝ち　二三二
吃音　二三七
文章について　二三二
人生観　二三六
一局の将棋　二四一
文字のこと　二四六
箱根八里　二五一

# 男性自身

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

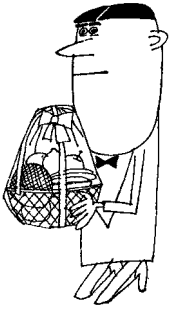
# ケ　チ

サラリーマンになるということは、ケチになるということである。

ケチに徹するというふうでなければ、とてもつとまらない。ケチという点においては誰とでも共同戦線をはることができる。なぜならば、収入はだいたいきまっているからであり、将来における見通しもついているのであるから、そのなかでよい暮しをしようと思ったり貯蓄しようと思ったり、または安心感を得ようと思ったら、積極的にケチになるより方法かないのである。それを咎める者はいないはずである。

ツキアイということがある。社員同士の交際である。ツキアイに要する費用はムダでも贅沢でもない。一緒に酒を飲んだりマージャンをしたりすることは、同僚の性格を知る手段である。相手の性格を知ることは仕事をするために不可欠のことである。他人の性格を深く知るためには酒と勝負事がいちばんてっとりばやい。それは仕事の面においてプラスになる。つまりツキアイに要する出費は必要経費である。小遣銭と混同してはいけない。もちろん、必要経費を極力おさえるという工夫もまた必要なのであるが。

従って、人の性格を知るに敏なる者はツキアイをする必要もないのである。



諸君は、諸君の上役、老練の係長、課長補佐、課長といった人のなかに多くの胃弱を発見されることであろう。

いまの世の中のサラリーマンで、管理職にある人が胃弱でないのはおかしいくらいのものであるが、この人たちは酒を飲まない。酒を飲まないことを看板にしている人もある。仕事で遅くなって、夜の街へでて、こっちからきりだすのも妙な話であるが、

「どうですか？」

と誘っても、

「いや……」

と首をふるたけである。

「残業代かはいりましたので、今日は私か……」

と言っても、

「君たけてやりたまえ。今夜はちょっと」

足早に地下鉄の穴に消えるのである。こういう晩なんだなあ、私が悪酔いして翌日会社を休んでしまうのは。

＊　＊

ところが、である。諸君はまたこういう事実も発見せられることであろう。この胃弱者の九十パーセントか会社の宴会では実に盛大に喰らい、かつ飲むということを。

私などよりはるかに健啖家であり、驚くべき豪酒家なのである。この事実を私はこう解釈したい気持になっている。会社の宴会は胃弱者より上長の部長・重役も出席している。こういう席でショ

ボショボした姿を見せてはいけない。豪放磊落に構える必要かある。部下に対しても太っ腹で思いやりのある管理者らしくふるまわなければいけない。そこで無理して飲んでいるのである。もし胃弱者がその席での最上位者であるばあいも〝今日は無礼講だ〟というポーズをとる必要かあるのである。

胃弱者の九十パーセントは、実は酒を飲めるのである。ただし、それをあからさまに示して、部下全員とつきあってしまえば給料を全部投げたしても足りないし、だいいち身体かもたない。

＊　＊

私かはじめて勤めた会社の直属の課長である加戸野泰造氏は、奇妙な人物であった。彼は私が勤めて半年ぐらい経ったときに胃潰瘍の手術をした。私は当然見舞に行くべきだと思った。手術か終って五日目に、会社かひけたら行こうと思っていると、総務課長がやってきて、加戸野氏の言伝てを言った。

「誰も見舞に来ないように、とおっしゃってます」

「しかし、私の直属ですから、行かないのはいかにも変でしょう」

「加戸野さんはねえ、見舞にきてくれるのは結構たかお返しが大変たからとおっしゃるのです」

私は、なるほどと思った。ハッキリしていていいと思った。病気をしたうえに、さらに出費かあってはサラリーマンとしては大事である。

総務課長は、加戸野氏から聞いてきた会社名のリストを渡した。同様の趣旨で、病気をしたが見舞に来ないように、私から電話するようにということだった。取引先の会社名と担当者の名前があり、全部で十五社だった。私はなんという清廉潔白な人かと思い、また万事にゆきとどいた課長を

もったことで幸福感につつまれ、ふるえる手でダイヤルを廻したことを憶えている。
「どうぞ、くれぐれもお見舞にお越しになりませんように、と申しております」
私の認識が誤っていたことに気づいたのは、一カ月もたってからのことだ。私の電話はいわば課長の病気を正式に知らせたことになる。取引先の会社となれば、知らなかったといえばすんでしまうことでも、聞いた以上は何かの処置をせねばならぬ。リストにあった会社で見舞に行かなかったところはなかったという。それは退院してからの課長の言葉からでも分った。課長は「困った、困った」と嬉しそうに言った。しかも、その見舞客は加戸野氏としてはお返しをする必要のない人たちばかりであった。

＊　＊

加戸野氏の謡曲の会があり、私たち部下五人が切符を買って聞きにいった。彼は美声であった。下手ではない。お世辞でなく私はほめた。水道橋から神保町まで歩いて、そこのトリス・バーへはいった。私は加戸野さんは珍らしく旦那気分になっているなと思った。稽古が続いて、下ざらいがあって、会があって、よくうたえたというのはいい気分だろうなあと思った。加戸野氏は私たちの「ほんとに驚きました、課長が……」「実をいうとあんまり期待してなかったんですが……」「とにかく声がよく通りましたよ」というはずんだ声を、「そうかね……そうかい」とニコニコ笑いながら聞いていた。私は甘えたつもりでストレートのお代りをした。二杯目を飲み終ったときに、加戸野氏は「じゃ、お先きに。おおいに飲みたまえ」と言って、すっと立った。残った五人のなかでは私が年長であった。このときのお勘定が七百八十円であったこともまだ憶えている。

＊　＊

私は一度だけ加戸野氏の家を訪れたことがある。日曜日だったが緊急連絡の必要が生じたのである。彼の家がむしろ邸宅と呼んだ方がふさわしいほど立派なので、かえって迷ってしまって、何度もその前を通り過ぎた。玄関は固く閉ざしてあって、勝手口から私ははいった。

スピッツがいて、芝生の庭へ抜けるあたりにバラのアーチがあった。応接室にゆったりしたソファがあり独逸製のピアノがあった。私たちがいつのまになくなったのかと噂していた広告代理店からもらった置時計も発見した。飲めないはずなのに応接室の一角はホーム・バーになっていてスコッチやブランデーがならんでいる。打合せが終ると、加戸野氏は「君は飲めるんだったね」と言ってスコッチの瓶を持ってきた。一杯ずつ注いで、時間をかけて飲み終ると「上等のウイスキーは余韻を味わうもんなんだ」といいながら棚に瓶をもどした。

＊　＊

私は加戸野氏を軽蔑する気持は微塵もない。そのことは、よく分っていていただきたい。ケチでなければサラリーマンは勤まらない。最後に笑うのは加戸野氏なのである。

# 私の赤ちゃん

『こんにちは赤ちゃん』という歌が流行した。ディスク大賞ということにもなった。

流行して、大勢の人が歌い口ずさみ、専門家が賞めるのは、この歌がよい歌だからだろう。大勢の人の気持に何かをうったえているからだろう。この歌がよい歌であるかどうかについては私にはわからない。そのことをいうつもりはない。

しかし、どうも『こんにちは赤ちゃん』という歌は、何だかこう私をやりきれないといったふうな心持にさせるのだ。

私は赤ん坊が好きである。そのことは何度も書いた。『赤ん坊愛好家連盟』といったような会があれば入会してもいいような気分でいる。ただし、私の好きな赤ん坊は、歩きだす少し前から満三歳ぐらいまでであって、そのことも別のところに書いた。

なぜその年頃の赤ん坊が好きかを説明するのはむずかしいが、まあ、ごく荒っぽく大雑把にいって無邪気ということでもよいが、なんといっても、その毅然たる態度が好きなのである。自分は愛されているという確乎たる自信が好きなのである。おそらく人間の一生でこのくらい自信に満ちあ



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.